慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	国際シンポジウム「医療人類学の最前線III: 家族・ 医療・ 政策」（6月24日 三田キャンパス東館4階交流室）
Sub Title	The international symposium of medical anthropology series III : family, medicine, and policy
Author	北中, 淳子(Kitanaka, Junko)
Publisher	慶應義塾大学グローバルCOEプログラム論理と感性の先端的教育研究拠点
Publication year	2009
Jtitle	Newsletter Vol.9, (2009. 8) ,p.5- 5
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	シンポジウム
Genre	Research Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO12002003-00000009-0051

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

シンポジウム

国際シンポジウム「医療人類学の最前線 III：家族・医療・政策」

The International Symposium of Medical Anthropology Series III: Family, Medicine, and Policy

（6月24日　三田キャンパス東館４階交流室）

文化人類学グループでは6月24日に、「医療人類学の最前線 III：家族・医療・政策」と題して三田でシンポジウムを開催した。社会科学各分野から30名の研究者が集まり、先端化する医療技術と、それによって変化し、再考を迫られている家族観について、人類学・社会学・歴史学の立場から活発なディスカッションが行われた。

プリンストン大学のAmy Borovoy先生は、アルコール依存症の夫をもつ日本人女性たちが、自らの夫婦関係を“共依存の病理”として捉えていく過程を追った人類学的研究で知られている。今回はフィールドを教育現場に移し、「障害」のある子供をめぐる対応の日米の差異の分析を行った。社会構造や家族構造の歪みが大量の「発達障害児」を生み出しているようにもみえる北米では、急速に広まった小児への抗精神病薬投与が社会問題化している。他方、北米ならば治療的配慮が必要と見なされるような子供たちも、他の子たちと同じ条件で“平等”に教育される日本では、しかし適応できない子が時に「ひきこもり」として家族に抱え込まれてしまう問題もある。このような差異を指摘した上で、Borovoy先生は、その背景にどのような家族、どのような社会が望まれているのかについて、日米で異なるヴィジョンがあることを論じた。

シカゴ大学のKathryn Goldfarb氏は、日本における生殖技術と家族観の歴史的変遷についての分析を行った。現在、少子化が憂慮される日本では、不妊治療が広まりつつある一方で、養子縁組に対しては“自然な”家族像から逸脱するものとして強い抵抗が残る。Goldfarb氏は、しかし戦前の日本では、血縁関係には拘らない養子縁組が広く行われていた事実に着目し、少子化の不安に彩られた言説には、血縁や生殖をめぐる国家のイデオロギーと、個人の欲望が時に共謀し、時に拮抗しあう複雑な関係性があることを指摘した。

総括コメントとして、生殖医療・遺伝子技術研究で知られる明治学院大学の柘植あづみ先生から、制度や公的言説からは零れおちてしまう共同体や個人の戦略的行為をどのように医療人類学的に分析できるのか、示唆に富む考察をいただいた。医学史の立場から塾内の鈴木晃仁先生に、文化人類学から、宮坂敬造先生にも刺激的なコメントをいただき、後半のディスカッションも盛り上がりを見せた。司会は慶大・医療人類学の北中淳子が担当した。（北中淳子）

As part of the Medical Anthropology Series, this symposium titled “Family, Medicine, and Policy” invited three specialists on medicine and Japan: Amy Borovoy from Princeton University (“What is a good society? Managing differences and disability in Japan”); Kathryn Goldfarb from the University of Chicago (“Reproducing the Body Politic: Infertility, Adoption, and Japanese Public Policy”), and Azumi Tsuge from Meiji Gakuin University. Akihito Suzuki and Keizo Miyasaka of Keio University also gave comments respectively from historical and cultural anthropological perspectives. The symposium was chaired by Junko Kitanaka of Keio University.

講演会

Soo-Young Lee 教授講演会

An unsupervised-supervised hybrid feature extraction of subtle emotional differences from human speeches

（5月21日　三田キャンパス東館４階交流室）

去る2009年5月21日、人間知性研究センターとの共催支援を受け、韓国脳科学研究センターのセンター長であるSoo-Young Lee教授の講演会“An unsupervised-supervised hybrid feature extraction of subtle emotional differences from human speeches”が開催された。韓国脳科学研究センターは、文字通り韓国における脳研究の中核機関であり、ヒト脳を対象とした神経情報処理・演算理論の研究を中心に、その応用としての人工知能の開発を大きな目標に掲げ、近年著しい成果を挙げている。Soo-Young Lee教授の研究は、ノイズ環境からの信号抽出に関する理論工学とその応用は、世界的にも大きなインパクトを与えている。今回の講演では、そのエッセンスを紹介された。特に、様々な環境ノイズの下で目標となる聴覚情報を選択的に抽出するためのいわゆる注意生成の人工システムについて、ご自信が開発された信号／雑音比に応じた処理層間における雑音キャンセルシステムを用いたモデルについて話された。また、現在進行中の研究として、視覚情報処理層の聴覚情報処理層への取り込みによる、情報抽出の精緻化の問題についても仮説的展望を紹介された。講演終了後には、聴衆と一緒にレセプションが催され、大学院生をはじめとする若手研究者の質問に熱心に応じられる姿がたいへん印象的であった。また、議論は講演内容にとどまらず、韓国と日本の学問的素地として、また、国家戦略としての認知・神経科学の違いにまで及び、参加者一同有意義な時間を過ごすことができた。（伊澤栄一）

A lecture entitled “An unsupervised-supervised hybrid feature extraction of subtle emotional differences from human speeches” was given by Prof. Soo-Young Lee on 21st May. He talked on an artificial processing model for selective sound extraction of speech information under noisy environment. Especially, he presented a current research of a new computational algorithm to extract selectively target speech sound by using visual information as a supervised signal. After the lecture, a reception was held and participants enjoyed the talk with Prof. Soo-Young. It was impressive that Prof. Soo-Young frankly and sincerely discussed with young researchers.